



## 👁️👁️ みどころ

イ・チャンドン監督の『オアシス』(02年)と『シークレット・サンシャイン』(07年)は主演女優の熱演が光ったが、同監督最新作は主演女優は老女。彼女は、今頃なぜ詩作教室へ・・・？

タイトルは美しいが、ストーリー的には性的暴行を受けた少女の自殺、事件のもみ消し工作、介護老人への恐喝(?)等々、悩ましい問題がいっぱい!そんな中で美しい詩作に励む老女の成長とは?しかして、ラストに朗読される「アグネスの詩」をあなたはどう読み解く?

## ムン・ソリとチョン・ドヨンに続く主演女優に注目!

脳性麻痺の主人公を演じたムン・ソリの熱演が光った『オアシス』(02年)(『シネマルーム7』177頁参照)第60回カンヌ国際映画祭での主演女優賞受賞も当然!というチョン・ドヨンの熱演が光った『シークレット・サンシャイン』(07年)(『シネマルーム19』66頁参照)は2つとも私の大好きな韓国映画だが、これはいずれもイ・チャンドン監督作品。この後にイ・チャンドン監督がプロデュースした『冬の鳥』(09年)は残念ながら見逃していたが、イ・チャンドン監督が本作で起用した主演女優は、1944年生まれユン・ジョンヒ。しかし、それってダレ?

1944年生まれの彼女は1960年代から70年代にかけて活躍した女優で、出演作は330本にのぼっているが、1994年の作品以降本作が久しぶりの出演になるそうだから、私知らなかったのは当然。ムン・ソリとチョン・ドヨンはとにかくすごく魅力的な女優だったが、久しぶりの新作にイ・チャンドン監督はなぜこんなおばさん(おばあさ

ん?)女優を起用したの?

## このタイトルから何を連想? アグネスとは?

本作の原題は『詩』、英題は『Poetry』。しかして邦題も『ポエトリー』だが、それには「アグネスの詩」というサブタイトルがついている。それって、一体ナニ?本作のストーリーの軸は、釜山で働く娘の代わりに中学3年生の孫息子ジョンウク(イ・デビッド)を引き取って2人で暮らしている66歳の主人公ミジャ(ユン・ジョンヒ)が急に詩作教室に通い始め、美しい詩づくりに没頭していく姿を描くもの。ところがその背景には、そんな詩の理想とは正反対の性犯罪やそのもみ消し、さらに老人介護のある断面などが描かれるから、社会問題性も十分だ。しかし、韓国の文化観光部長官(日本の文化庁長官にあたる)も務めたことのあるイ・チャンドン監督は、本作をあくまで上品でおしゃれな祖母ミジャの視点で貫き、声高な主張はもちろん自分の価値観を示すこともしない。第84回アカデミー賞外国語映画賞を受賞したアスガー・ファルハディ監督のイラン映画の名作『別離』(11年)もそうだったように、決して観客に監督の視点や結論を押しつけず、あくまで観客の見方に委ねているわけだ。

映画冒頭、川の流れて浮かんでいる女の子の死体が映し出されるが、これって一体ナニ? アグネスとはこの女の子の洗礼名(クリスチャン・ネーム)だが、もしこれがジョンウクたち6人の仲良しグループによる性的犯罪の結果だとすれば由々しき社会問題。ミジャにとっての1番の幸せは、かわいい孫息子が自分のつくった料理を「おいしい」と言って腹いっぱい食べてくれること。しかし、もしジョンウクがホントにそんな陰湿な性犯罪に加担しているとしたら、美しい詩づくりに没頭するだけではなく、何かやらなくてはいけないことがあるのでは・・・?内心でそんな風に苦悩している祖母ミジャ役を、ユン・ジョンヒが静かに熱演!たしかにストーリーとしては『オアシス』や『シークレット・サンシャイン』の方が格段に面白かったが、本作におけるユン・ジョンヒおばさんの静かな熱演に拍手!

## どうやったら詩が書けるの?

本作で詩作教室の先生キム・ヨンタクを演ずるのは、本職の高名な詩人キム・ヨンテクらしい。そのせいかもしれない(?)が、「詩は、見て書くものです。人生で1番大事なのは見ること。世界を見ることが大事です」と生徒たちの教えるキム・ヨンタク先生の言葉には説得力がある。それを聞いたミジャはたちまち家に帰るとりんごの観察に夢中になるのだが、「やっぱり、りんごはおいしく食べるのが1番」と食べてしまうのは、先生の教えを理解していない証拠?もっとも、バックの中に常にノートとボールペンを入れ、美しいものが目に入るとすぐに言葉をメモするその後の姿勢は立派なものだ。他方、このように言葉を選びながら詩作を目指すようになった途端に、病院の医者から「アルツハイマー症

が進行中です。今後少しずつ言葉を失っていくのはやむをえません」と宣告されたのは皮肉なものだ。

本作にはそんなミジャがいろいろな機会でいろいろな人に「どうやったら詩が書けるの？」と質問するシーンが登場するが、それに対する答えはみんな似たり寄ったり。それを聞いたミジャは一応納得しているようだが、ホントは納得できていないはずだ。本作では、ジョンウクが犯した犯罪のもみ消し(?)をはかるため、ジョンウクの友人ギボムの父親(アン・ネサン)たちとの協議によって、ミジャがアグネスの母親(パク・ミョンシン)に会いに行くときのシークエンスが面白い。ミジャは美しい自然の中で農作業をしているアグネスの母親の姿を見ると本来の目的を忘れてしまい、アグネスの母親と詩作の話で没頭してしまうことに……。ここまで熱中すれば「どうやったら詩が書けるの？」と聞いて回らなくても、もはや1人で立派な詩が書けるのでは？

しかして、本作のラストでは詩作教室に提出した「アグネスの詩」と題する詩が先生によって朗読されるが、さてその出来は？



(C)2010 Unikorea Culture & Art Investment Co. Ltd. and PINEHOUSE FILM. All rights reserved.

### この行為は明らかに恐喝だが・・・

娘を失った母親との示談金の相場は3000万ウォン(約215万円)(6人で割ると1人500万ウォン)らしいが、それって私の目にはバカ安!それはともかく、ミジャ以外は500万ウォンは負担できそうだが、ミジャにはその負担能力がないことがミエミエだから、6人の非行少年(?)の親たちの協議はもっと細かく煮詰めなければ……。もっとも、それは弁護士の視点であって、本人たちのレベルでは仕方なし?ミジャを除く5人の親たちが学校側と協議し、マスコミにも注意しながら熱心に動いていることはよくわか

るが、それに比べるとミジャだけはどこかのどか。というより、間が抜けているからホントに大丈夫？

アグネスの母親との示談の話を誰がどのようにまとめたのかは本作のテーマではないから全く描かれないが、話がまとまればミジャが500万ウォンを準備しなければならないのは当然。そんな状況下、カネのないミジャはギボムの父親に対して貸してくれと頼むのだが、余裕のないギボムの父がそれを拒否し、「娘さんに相談しろ」とアドバイスしたのも当然。ミジャの収入の元は身体が麻痺している金持ちの老人（キム・ヒラ）の介護ヘルパーの仕事だが、その収入はしれているはず。他方、半身不随の老人だって色気（性欲）があるから・・・というストーリーはいろいろな小説で出てくるが、パイアグラを飲んで浴槽内で「死ぬ前に男にさせてくれ」と迫る老人の姿は痛々しい。もちろん、ミジャはそんな要求に対して「バカにしないで」と断固拒否し服を投げつけたが、その数日後のミジャのあっと驚く行動（セックスシーン？）に注目！こんな行為に及んだミジャの女性心理をあなたはどう理解？さらに、この老人から500万ウォンを出させるミジャの行為は明らかに恐喝だが、そんなミジャの女性心理をあなたはどう解釈？

## ラストの意外な展開を、あなたはどう読み解く？

最近の邦画は何でも説明調が過ぎるため面白くないが、本作のラストの展開はポイントになるシーンがつながれるだけだから、よくよく注意して観ておく必要がある。面白いのは詩作教室に通うパクおじさん（キム・ジョング）の職業が刑事らしいこと。刑事が詩を書いて何が悪い！と思うのも当然だが、刑事に詩作が似合わないのは仕方ない。もっとも、彼の書く詩はどことなく卑猥だから（？）ミジャの目には詩を冒瀆しているように映ったらしい。

66歳になったミジャがやむにやまれず恐喝まがいの行動に及んだのはいろいろな人生体験をしてきたことの成果（？）だが、こよなく詩と卑猥な話を愛するパク刑事の人生経験もかなり豊富らしい。多くの刑事ドラマでは刑事は勢い込んで犯人逮捕に向かうものだが、本作にみる逮捕風景はそれ自体がきわめて詩的だ。ミジャが孫息子とバドミントンを始めたのは医者から「右腕が上がりなくなったのは運動不足のせい」と言われたためだが、ある日車に乗って同僚の刑事と2人で近づいてきたパク刑事は、拍手をしながらバドミントンの中に入ってくると・・・。えっ、ミジャが500万ウォンを準備できたから、アグネスの母親との示談は無事成立したのでは？それによって、あの忌まわしい事件は解決したのでは？

本作は最初から最後までミジャが登場するシーンが圧倒的に多いが、ストーリー展開はあくまでスローで静か。しかし、ラストに訪れるそんな静かなシーンを、あなたはどう読み解く？

2012（平成24）年3月13日記